

今後の日本の英語教育の提案

—インド現地校とインターナショナル校の比較から—

前ムンバイ日本人学校教諭

鹿児島県西之表市立榕城小学校教諭 濱上 雄太

キーワード：在外教育施設、ムンバイ、英語教育、国際交流、現地校、インターナショナル校

1. はじめに

物心がついた小学生の頃から、英語や国際交流に興味があったが、今回ムンバイ日本人学校で教鞭をとることになり、英語を公用語として話すインドの英語教育について研究させていただくことができた。インド現地校とインターナショナル校の教育を比較するとともに、それらの中で、ムンバイ日本人学校に足りていないものや活かせるものを実践した。そのことについて紹介したい。

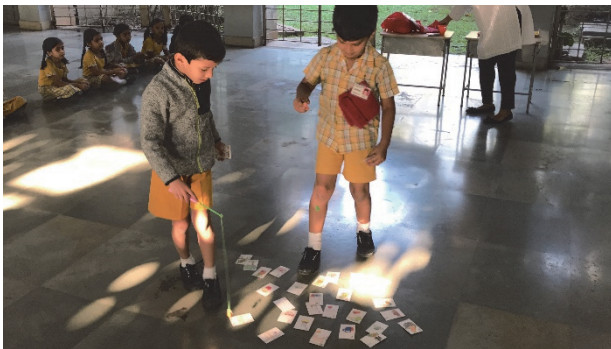
2. インド現地校とインターナショナル校の参観

(1) インド現地校 Udayachal primary school

まず、家庭での言語環境はほとんどがヒンディー語、マラティー語、グジャラート語などインドの言語を話す家庭が多く、英語を使う家庭はほとんどない。こちらの学校の幼稚園（3歳から）で小学校に入学するまでは、英語に親しむ教育が行われている。実際には、リスニング・スピーキングがメインとなっている。

家庭で使用する言語がそれぞれ違うこともあり、学校では英語を使用することで全員とコミュニケーションがとれるという環境にあるため、英語が共通語となっている。校則としても校内では英語を話すように定められている。特別支援の子ども達も一緒に学習しており、彼らも個人差があるが英語を話す。セミリンガルのような言語障害などは見られず、子ども達はいくらかでも言語を吸収するということである。

学習形態は、1クラス30人ほどと日本の小学校と変わらない。英語の授業は、もちろんすべて英語で行われる。小学3年生で、品詞や接続語、過去形の学習を行っている。授業は、最初の段階では知識のインプットを行い、次の段階で、その知識を使ったライティングやリーディングを行う。最終段階で、子ども達の興味を引くような教材教具を使ったアクティビティーを行い、定着を図っている。一斉授業に近い。



教具は再利用品や自然からの手作りものが多い



手作りの台所セットやバス会社等が並ぶ

学習者の意欲・態度については、驚くことに、教室にいるほぼすべての児童が授業に、主体的に取り組んでいる。一斉授業のような形であっても、一人ひとり目を輝かせてアクティビティーに取り組み、そしてそれを見守り、挙手をする。音楽の授業でも、床に座り、肩を揺らしたり、振り付けをしたりして、授業そのものを楽しんでいる。勉強をしなければならないといった気負ったものは感じられず、ただ授業を純粋に楽しみ、のめり込んでいた。日本の子ども達は、幼いころから刺激的な玩具で遊び、本を読み、テレビ番組を観たりして育っているため、好奇心を動かすハードルが高くなっているのかもしれないと感じる。子どもたちの学ぶ意欲を高める手立てを考えていく必要がある。

使用教材・教具については、州政府より配付される教科書（約1100円）と学校が採用しているテキスト（約500円）を使用している。ノート記録も、無駄がなく、すっきりとまとめられている。文法もイメージで捉えられるように指導されていることが分かる。ノートの他に、教室の床にチョークを使って書いていることも見られた。授業をする場所も教室にとらわれずに、多目的広場や廊下で行われている。学校全体を教具として考え、子ども達も飽きずに授業に臨むことができている。ほとんどの教具は、教員が手作りしたものである。子どもたちの興味・特性に合わせて作られる手作りの教具に子ども達が興味を示さないはずもなく、アクティビティーはとても効果のあるものとなっている。

(2) American school of Bombay校

今回、1年生と4年生の授業を参観した。言語環境について様子を見たが、国籍は、欧米・アジアと多様である。英語は、家庭で使用されている場合が多く、口語では既に自在に操っている児童が多かった。英語の授業も1年生から、本の書き出しは、①一語で短く表す②事実を述べる③問いかけるなど、日本の4年生の国語で学習する内容が行われていた。朝の会を50分間と長く設定し、生活場面から英語や概念を獲得できるように工夫している。



マス目のついたマットと淡い色の室内装飾



個人が授業を受ける場所を選択できる

学習形態は、1クラス15人程度、担任とアシスタント教員で構成されている。授業は、すべて英語で行われる。アシスタント教員と交互に主でクラスをコントロールしたり、支援対象児童に適宜ついたりチームティーチング授業の効果が発揮されているのを強く感じた。担任は、アメリカ人で、アシスタント教員は、現地採用（インド人）で構成される。個やグループでの活動が多い。

児童の学習態度には、大きな差が見られた。きちんと座っているが、あまり意見を言わない子。寝そべって聞いていたり、寝そべってテストを受けたりする子。このように態度には大きな違いが見られたが、それは意欲が無いということではなく、個々のペースで学習に取り掛かっているということが教員の話から分かった。

その背景として、多くのアメリカンスクールでは、「Responsive classroom」という形態を取り入れていることが分かった。教師は、穏やかに児童に話しかけ、児童が取るべき行動を児童に選択させていた。教師が同じ土台に立って、大きな声で話すのではなく、落ち着いた口調で話すことにより、落ち着いた環境が作られ、

児童は、自分の判断力を身に付けていくことが分かった。常に机椅子を使っているのではなく、低学年はマスの目のついたカーペットや高学年はソファーなど、学習者がリラックスしたり、疲れを軽減したりしながら学べる環境を提供することで、意欲が高まったままの状態を保持できているのだと考える。教室は、低学年は落ち着いた淡い色でまとめられ、椅子の後ろにテキストを入れる袋があり、文房具はテーブル中央に共有して使うようにまとめられていた。児童の意欲を高めるための環境整備や手立てが手厚く保証されていた。児童参加型の掲示を使って常に児童の興味関心を高めようとしたり、膨大な図書を揃えたりして、児童が本に親しみを持つように工夫している。

使用教材や教具については、黒板はなく、小さなホワイトボードを使用していた。大型テレビを使って、学校独自の動画教材を使ったり、書画カメラを使ったりした。また、児童はタブレット端末やパソコンを使い、特に発展問題に挑戦したり、または自分で問題を、専用ソフトを使って作っていた。習熟が、未到達な場合は、教室の外で担任と小さなホワイトボードを使って補習を受けていた。学習の効率化が最大限に行われているように感じた。

3. インド現地校とインターナショナルスクール校の比較

【インド現地校とインターナショナルスクールの共通点】

- ・使用言語が英語
- ・児童の興味関心を高める教材・教具の導入
- ・工夫された掲示設営
- ・廊下等の教室外も使った場の設定
- ・床に座る・椅子に座る等、動きのある学習体系
- ・TT授業

【インド現地校とインターナショナルスクールの相違点】

- ・リサイクル品等を使った手作り教材・教具と最新IT機材
- ・一斉授業と個々の段階に合わせた補充・発展学習
- ・教師主体の掲示と児童参加型の掲示・具体物を使った掲示
- ・同じ作りの教室と発達段階に合わせた色味の教室、設備の使用
- ・外国語としての教授と母国語としての教授
- ・州発行のテキストと学校独自作成動画・テキスト

【考察】

学費によって、大きく環境面に影響が出ていることは否めない。しかし、それぞれの状況で最大限の学習環境や・教具を作っていて、その想いは子どもに確実に届き、高い興味関心意欲を引き出しているように感じた。もちろん、どちらも常時英語を使用している。

以上のことから、英語は授業の一場面で慣れ親しむだけではなく、施設や教材・教具など常時英語が飛び交っている等の最大限英語に触れることができる環境にする事が望まれると考えた。

4. 上記の研究から、ムンバイ日本人学校で実践したこと

- 学校外（放課後学習E-TIMEの開始）

英会話や英語でのゲームなどを行う放課後学習を月に二回の頻度で開始した。特に、低学年では効果が見られ、臆せず英語を話そうとする姿が見られるようになった。

- 学校行事（グルモハル祭での交流活動の追加）

ムンバイ日本人学校では、毎年グルモハル祭という現地校IITスクールの児童を招待して日本の夏祭りを体験させるという行事を行っていたが、さらに交流を拡充するため、活動の始めにお互いの名刺交換を行い、自己紹介をし合う時間を追加した。名刺をもとに積極的に動き回り、相手のことを知ろうとし、自分のことを伝えようとする姿がみられた。

○ 学校行事（野外活動三日目でのIITスクールとの交流活動の追加）

これまでは、IITスクールの児童との交流はグルモハル祭だけであったが、低学年の野外活動の三日目に相手校を訪問し、交流を行う時間を追加した。インドで伝統的に行われているパペット作りや土器ペインティング体験などを教えてもらいながら、自己紹介だけにとどまらない、実際の学習場面で英語を使用する交流を行った。

○ 低学年学習（年間を通した複数回の交流と共同プロジェクトの実施）

互いの学校を訪れて、一緒に音楽や図工・体育などを学んだ。実際には、毎回手紙を送り合って、自分の気持ちを英語や絵で表して伝えた。本校の学習発表会では、交流児童全員も登壇して、発表を行った。共同プロジェクト名は、「共生 ～ともだちとは～」である。

○ 学級内（E-LUNCH・E-MEETING）

昼食時間に英語を使用することを原則とした。初めは、単語であったり、話さなかったりする児童もいたが、数カ月するうちにリラックスした状態で、ゆっくり話し始めるようになっていった。朝の会や帰りの会の進行を児童が英語で行った。

以上、児童生徒が最大限英語に触れることができる環境を設定した。特に、1～3年生の児童の英語への抵抗感がほとんどなくなり、積極的に英語を1つの表現方法として使うようになったことは、成果として感じた。このことから、低学年からの英語に触れることの重要性を改めて感じた。



ムンバイ日本人学校の学習発表会で共に発表



IITスクールにて、共同作業

5. 日本の今後の英語教育への提案

英語に触れる環境を整えていくことが必要だと考える。まず、校内の掲示物を英語に変えられるものは変えていく。そして、発達段階に応じて朝の会や帰りの会、集会活動などを英語で行う。また、学校での児童の放送を英語に置き変えるイングリッシュデーを週に数回設ける。英語に関わらず、児童用パソコンやタブレットに補充・発展学習ができる学習ソフトを入れる。

最後の提案は、在外教育施設派遣教員が赴任先で、自身の派遣元の都道府県の学校と交流することのできる学校を見つけることである。メールやビデオ通話をするなど、実際にオンライン上で海外の同年代とコミュニケーションをすることは、児童の興味関心・実践意欲を最大限に引き出すことができると考える。この方法により、日本の学校は世界各地に交流校を増やすことができ、またほとんどコストをかけずに最大限の英語や国際理解の意欲をあげることができると考える。

6. 感想

私は派遣2年間で、ウダヤチャルスクールやアメリカンスクール、セイント・ザビエルスクール、IITスクール、ゴア大学と公私ともに訪問した。そして、ムンバイ日本人学校との交流だけではなく、帰国後の派遣元都道府県の学校間交流を取り付けてきた。経験できたことを日本、特に県の子ども達に還元できたと思う。現在、4年生の社会科の学習でゴミ問題を取り扱っており、インドの深刻な状況を写真で見せたり、インドでゴミ問題を解決しようと会社を設立したインド人の友達にも連絡をしたりして外国語だけでなく、多様な点から交流のタイミングを計っているところである。在外教育施設に派遣させていただいた経験とその意義をこれからもしっかりと胸に止め、目の前の子どもたちに向かいたいと思う。